活動名　石川県白山市「道の駅めぐみ白山」をプラットフォーム（拠点）とした白山市の地方創生トライアングルプロジェクト

団体名　新ゼミ、岸本ゼミ、青木ゼミ

代表者名　経済学部　新　広昭

はじめに（背景・目的・目標）

「道の駅」は、道路利用者や地域の人々のための「情報発信機能」、地域振興を担う「地域連携機能」等、多様な用途を持つ施設、すなわち地方創生のプラットフォーム（拠点）であり、地域での役割や地域からの期待も大きい施設となっています。

こうしたことから、国土交通省では、平成27年度より全国の「道の駅」と大学との交流・連携を推進しています。この取組みは、「道の駅」が地方創生の拠点を目指して進化を遂げるため、「道の駅」と大学がお互いのニーズを確認し、付加価値を創出するための企画・立案するというプログラムです。

また、白山市は北陸新幹線の敦賀延伸をひかえ、白山車両基地やジオパーク・エコパークを核とした地方創生を目指しており、その拠点として国土交通省金沢河川国道事務所との連携により「道の駅めぐみ白山（以下、めぐみ白山）」を2018.4.27にオープンしました。

大学としても、地域貢献に加え学生に地域への参画意識を高め、地方創生の担い手としての知識とスキルを身につけもらい、地域連携活動に積極的に貢献・参画していくことが極めて重要になっており、本学は2017.3に白山市と包括連携協定を締結し、学部ごとに特徴ある連携事業に取り組んでいます。

そこで、本プロジェクトは、この３者の連携による地域貢献活動として、「道の駅めぐみ白山」をプラットフォームとした白山市の振興等に関して参加ゼミの特徴を活かした、調査・プロモーション活動を行うものです。

活動内容

１　新ゼミと青木ゼミの活動

新ゼミと青木ゼミでは、2018年8月30日、31日の両日、「道の駅めぐみ白山」においてゼミごとに調査テーマを設定してフィールド調査を行いました。

新ゼミのテーマ

①販売商品等のＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）への関連付け調査

白山市は2018年6月、国（内閣府）からＳＤＧｓ未来都市に選定されましたが、その情報発信の意味合いも含めて、めぐみ白山での販売商品（主に地元企業、農家の委託販売）12品目をＳＤＧｓに関連付け（紐付け）するという調査活動を行いました。多くの商品が「8 働きがいも経済成長も」、「11 住み続けられるまちづくりを」、「15 陸の豊かさも守ろう」に関連付けられることがわかりました。

販売商品のSDGsへの関連付け例

SDGs商品調査の様子

②めぐみ白山情報コーナー情報発信力調査

道の駅は、地域の様々な情報の発信基地としての機能を期待されていますが、めぐみ白山の情報コーナーを訪れた方へのアンケート調査を行い、どの程度情報が伝わっているかを調査し、調査結果を踏まえた様々な提案を行いました。

③交通量調査

青木ゼミと合同で、めぐみ白山に入る自動車の台数やナンバーを調査し、時間帯における集客の傾向などを把握し、さらなる集客への提案を行いました。

青木ゼミのテーマ

①施設満足度等調査

めぐみ白山への来客者 100 名に対して、来店目的、施設の情報源、満足度、再来店したいか、印象に残った施設・サービスといった項目のアンケート調査を行い、今後の改善点などの提案を行いました。

②施設チェック調査

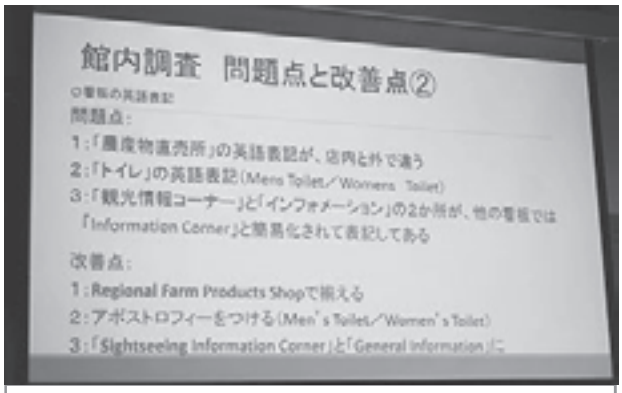
学生がめぐみ白山の利用者（来客者）の視点に立ち、施設の使い勝手や表記のわかりやすさなどを調査し、改善点などの提案をしました。

③施設案内表示調査

国道を走る車への案内表示（看板等）を調査し、数や配置が集客に効果的か分析し、改善点を提案しました。

以上の新ゼミ、青木ゼミの調査結果は 10 月 31 日に国土交通省金沢河川国道事務所、白山市役所、めぐみ白山の方にも聴講していただき、発表会を開催しました。

発表会の様子



発表会でのスライド（施設チェック調査）

２　岸本ゼミの活動

①リ・パケージプロジェクト

製品は中核ばかりで構成されているわけではなく、それを補完する実態部分も必要となります。今回はパッケージという実態部分の変更により、実際に売られている製品の改善を試みました。株式会社ノース白山のお茶の基本パッケージを、学生たちのアイデアとデザインにより変更し、道の駅めぐみ白山でテスト販売しました。

リ・パッケージした健康茶

②洋梨プロジェクト

昨年度より活動している、白山市で少量生産されている洋梨を白山市の名物にできないかというプロジェクトです。本年は洋梨の土産物としての可能性を検証するために、道の駅めぐみ白山での洋梨のスイーツをテスト販売しました。

販売に至るまでに学生たちは洋梨農家への調査を行いました。その後の製品開発については株式会社

ぶどうの木と協同でアイデア提案、発売製品の決定、コスト見積もり等を行い、「ラ・タルト」と命名し2018年11月23、24日に発売しました。

この両プロジェクトの成果は、2019年2月21日に白山市役所、株式会社ブドウの木、株式会社ノース白山の方にも聴講していただき、発表会を開催しました。

ラ・タルトの販売の様子（めぐみ白山）

成果、結果の考察

①めぐみ白山でのフィールド調査

めぐみ白山でのフィールド調査は、道の駅が地域活性化の拠点として進化を遂げるため、学生が道の駅の付加価値を創出するという目的で行ったものですが、発表会の席上、白山市役所、めぐみ白山の方からは、講評として、「現場はめまぐるしく変化する“生き物”なので、実際に現場へ出向き、調査をして得るものの重要性を感じてほしい」、「この調査を機に白山市をフィールドとしてどんどん活用してほしい」、「今回提案してくれた意見や提案をぜひ取り入れたい」といったコメントをいただき、付加価値の創出といった点で一定の成果があったものと考えられます。

また、SDGs 商品調査を担当していた学生からも、「商品の中には自分が日ごろ目にしていたものもあるのですが、意識を変えることで今までとは違った商品の見方ができるようになりました。商品の売り上げがまちづくりのための資金となったり、伝統の継承に役立ったりと、企業の営利以外の面にも使われていることがわかりました。」といったコメントが聞かれ、社会を見る目が育ってきていることがうかがえました。

②リ・パッケージ、洋梨プロジェクト

リッパッケージプロジェクトでは、パッケージ変更後で週当たりの売上が約３倍になり、包材面のコスト的な問題はあるものの、継続販売がなされた他、他のチャネルでも既に販売されるという成果を得ました。その結果、今回テスト販売で使用したパッケージをそのまま継続使用いただくことになりました。

今後、その他の道の駅の製品でのリ・パッケージに関しても十分な成果が期待できます。

洋梨プロジェクトでは道の駅での販売の２日間で、用意した製品はすべて完売し、洋梨の土産物としての可能性を示唆することができました。今後は生菓子以外の開発の可能性を探索し、白山産の洋梨の名物にする活動を継続する予定です。

両活動ともに連携した外部組織のみなさんが真剣に接してくださったことで、通常のインターシップ等でも体験できない貴重な体験ができたという学生たちからのコメントが多数聞かれました。

今後の課題、展望

白山市との包括連携協定に基づいた、白山市内にある道の駅をプラットフォームにした連携活動は2018年度で２年目になりますが、今年度の取り組みを通じて、白山市と本学とが互いの資源を活かしてWin-Win の関係を築いていくという形ができつつあることを感じました。

すなわち、白山市にとっては、本学の知的資産や学生の若い感性を活用して SDGs のまちづくりや地場産品の振興といった地域課題を解決する、本学にとっては、本学の知的資産を社会実装し、また学生が活躍、成長する場を確保するといったことです。

2019年度以降も、こういったWin-Winの関係が維持・発展できる限り、この取り組みは続ける価値があると思います。